
とある少年の正義の法則

アルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少年の正義の法則

【Nコード】

N69920

【作者名】

アルト

【あらすじ】

学園都市の柵川中学校に通う少女、桜木朱音はとある事情でレベル0のはずの少年、植木恭介が能力を使っているのを発見する。

しかし、それは学園都市の能力とは根源が違う、全く別の能力だった。

《注意》

この小説にはご都合主義だったり、オリ主だったり、厨二病が入っ

たりする可能性があります。
それらが嫌いな方はご注意ください。
作者はじめての小説です。

ゝ植木恭介の法則（前篇）ゝ（前書き）

更新は遅いと思いますが、よろしく願いします。
ああ、時間がほしいorz

「植木恭介の法則（前篇）」

超能力が科学的に解明された世界。

以前はあるかどうかもあやふやで、空想的な概念だったものがカリキュラムを受けることで得ることができるようになった世界。

そして超能力の研究、能力開発を行う『学園都市』が建設された。特色ある二三区からなり、人口二三〇万人、東京都の三分の一相当にもなる超巨大な都市である。

学園都市というだけにはあり、膨大な数の教育機関が存在しており子供たちが日夜能力開発にいそしんでいる…

ここは柵川中学校。

温かい陽気が降り注ぎ、ついあくびが出てしまいそうなくらい天気がよい春の季節。

最近入学式が終わったばかりで、新入生たちが新たな学校生活に期待をふくまらせ青春を謳歌しようと思いを巡らせる。

今は授業中なのか休み時間中友達と会話する時のような楽しげな声は聞こえない。

「で、あるからして自分だけの現実の獲得は…」
パーソナルリアリティ

「……寝むい」

一年生の教室の一つで生徒達が黙々と教師の授業を聞いている。そのなかで、頭がかくかく揺れており今にも寝そうな生徒が一人緑髪でボーっとした瞳、若干ツンツンした髪からはひと房だけ尻

尾のように腰まで伸びている。

…いまにも鼻提灯を出し、机に突っ伏してしまいそうである。

そんな少年を後ろから注意深く見つめる…というか、睨みつけている一人の少女がいた。

まるで一挙一動を逃すまいとしているかのようなうだ。

うえききようすけ
「植木恭介……あんたの秘密、暴いてやるんだから！」

そう意気込む緋色つばい髪のポニーテールの少女……桜木朱音はさくらぎあかねそう呟いた。

なぜ少年を親の仇のごとく睨みつけているその理由は、一週間ほど前にさかのぼる…

「待てやこのガキー！」

「待てと言われて待つ馬鹿はいないわよ！」

日が落ち、街路灯で照らされた学園都市で一人の少女と四人の男が盛大な追いかけっこをしていた。

少女の手にはスーパールの袋が握られており、買い物の帰りだということが分かる。

「あーもう！なんでこんな状況になっちゃうかなー…」

トホホ、とこれまでの行動を思い出しながら物思いにふける。

少女：朱音は学校から帰り、冷蔵庫の中身がないことに気づき買い物に出かけたのだが

いろいろ買い足している間に夜深くになってしまっていた。

買い物に満足し、スーパーから出た後男たちに絡まれている少女を見てしまったのである。

誰かに助けを求めている少女を見捨てるわけにはいかない。

男にタツクルをかまし、少女を逃がしたまでは良かったのだが、恨みを買ってしまい

一大逃亡劇を繰り広げているのである。

「いい加減に諦めなさいよっ！」

そう叫びながらも、走り続ける足は止めない。

バックからは止まれーだの、待ちやがれーだの罵声が聞こえてくる。

どうにかして逃げ切らねば…！と考えるも策もなにも浮かばない。そしてついに体力的に限界が近づき、袋小路に入ってしまったところで追いかっこは終了した。

「も、もうにげられねーぞ！覚悟しやがれ！」

「なによ、あなたたち恥ずかしくないの！？」

女の子を多人数で囲むわ、追いかけまわすわ恥を知らないよ！」

ビシイ！と指を突き付け、積もり積もった文句を浴びせる。

追いかけまわされるわ、理不尽な暴力をうけそうになるわ、いいかげん堪忍袋の尾が切れそうなのである。

「うるせえ！この恨みしつかりとはらさせてもらっぜ！」

そう男は言い拳を振り上げる。

万事休すか…と思い目をつむった瞬間。

ゴスッ！！

「がはッ！？」

「は……？」

男の頭上から快音がするとともに、奇声を上げつつ男が倒れこんだのだ。

朱音が何もしていないのにもかかわらず。

いったい何が起こったのかと、朱音は暗いなか必死に目を凝らした。

「木……？なんでこんなところに

っていつかどうしたらこうなるのよ……？」

目を凝らしたところ、男の頭上に木が覆いかぶさっていたのだ。

これから察するに、この木が男を気絶させたのだろう。

まるで、木の幹が折れて倒れてきたときのように。

しかし、このあたりに木やそれに値するものは一切植えられていない。

「あべし！？」

「うっ！？」

朱音が木の所在について思考を凝らしている間に、どんどん不良たちが倒されていく。

ついには全滅してしまい、男たちの鈍痛に対するうめき声で夜中の路地裏に埋め尽くされる。

朱音がいったい誰が、と不良たちの後ろを見る。

そこには暗闇でよく見えないが緑髪の少年がいた。

たぶんこの少年が助けてくれたのだろう、と見当をつけお礼を言おうとする。

…が、そこで予想外の事態が発生した。

「……ってなんで逃げるのよっ！ まちなさーい！ こらああー！」

あろうことか、少年はくるっと反転すると、勢いよく逃げだしたのだ。

すぐさま追いかけたが、見失ってしまう。

「あちゃー、見失っちゃったー！ …でも、あの顔どこかで見たような……」

袋小路では暗くてよく見えなかったが、表通りに出た時に一瞬街灯で照らされた顔が見えたのだ。

自身の記憶を掘り起こし、そして一人のクラスメイトに思い当たった。

「植木恭介……？ でも、あいつレベル0のハズじゃ……？」

能力者は能力のレベルによってランク付けがされる。

上は5、下は0と数字が増えるごとに能力が強力になっていく。

レベル5なんて学園都市に七人しかいないほど希少な存在なのだ。そのレベルにもなると、軍隊とも渡り合えるほど強力になるので

ある。

ちなみにレベル0は学生の六割近くを占めており、朱音もその一人である。

自身の記憶が確かなら、植木恭介はレベル0のはずである。

レベル0は能力を使えず、使えたとしても微弱で検知が難しい。

さっきのような、木を生やすなど到底無理なのである。

（あいつはレベル0……でも能力を使った、一体どういうことなの？）

レベル0なのに能力が使えるという矛盾、それがどうしても気になる。

元々、朱音は好奇心が旺盛なほうである。

本能がろくでもないことが起きるぞと警鐘を上げるが、それ以上にその類まれな好奇心が本能を押しつける。

そして決心する。

「……こうなったら、徹底的に調べてやるんだから！」

（で、いろいろ調べてみたはいいものの、全く情報がないのよねー……）

朱音は眉間にしわをよせ、途方に暮れる。

あれからあちこち調べてみたのだが、全くそれらしいことは見つからなかったのである。

ネットのその手のサイトや、都市伝説系統の本もしらみつぶしに探したのだが

一向に見つからない。

拳句の果てに風紀委員などが利用しているとあるデータベースにハッキングまでやらかしたのだが

何者かに阻まれてしまい、何も情報が得られなかった。

そんなこんなで万策尽きてしまい、現在進行形で五里霧中なのである。

だが、ここまで来て引き下がるわけにはいかない。

朱音はそう考え、あまりいいとは言い得ない頭をフル回転させ思考をまとめ、そして…

「こうなったら、放課後あいつについて行ってボロが出るまで付きまとしてやる!」

…ひらめいた。

逃げたということは、人に知られたくはないということ。

ならば、植木が能力を使ったところで問い詰めればいいのだ。

ふっふっふ、といきなり笑い出し怪しい顔になった朱音を見て回

りのクラスメイトは

ギョツとした顔になる。

完全に危ない人を見る目線だ…

そうして時間は過ぎていく。

穏やかで、騒がしくて、大切な時間。

「植木恭介! 起きなさい!」

「…………んあ？つていつてえ！」

そんな中、朱音に睨まれていることに気づかずぐーすか寝ていた
植木は

教師にゲンコツをくらい悶絶していた…

放課後…

授業が終わり、生徒たちがいそいそと学校から出て行っている。
ある人は友達と遊びに、またある人は学校に残って勉強したり。
それぞれが思い思いの行動をしている中、異端な行動をしている
少女が一人…

「さーてあいつ、いつ能力を使うかしらね…」

そうつぶやき悪い顔をしている朱音。

電柱に隠れながら、植木の追跡をしていた。

コソコソしながら植木の死角を歩き、さながらどこぞの推理漫画
の初期の迷探偵のようだ。

…他の通行人からはまたもや珍妙な人を見る目で見られている。

ちなみに、とうの重要参考人、植木は信号待ちで立ち止まってい
る。

（にしても、なんであいつ能力を隠すのかな…

あそこまでの能力ならレベル3くらいはいきそつなのに）

ふと、朱音の中に疑問が浮かぶ。

学園都市では、レベルによって待遇が変わる。

レベルが高くなるにつれ、奨学金が多くもらえたりするのだ。

1レベルでも侮るなかれ、一つのレベル差が能力者同士にかなりの貧富の差をもたらす。

一定のレベルがないと入れないエリート校までもが存在するのだ。
有名どころで言えば、常盤台中学や長点上ながてんじょうき機学園ときわだであろう。

他にもメリットがあり、能力レベルこそが絶対といっても過言ではない。

なのに、なぜ植木は能力を身体検査システムスキャンで使わないのか。

（私なんて、ほしくても手に入れることができないのに……）

そう考え、顔を伏せて悔しさで歯をかみしめる。

むなしさと悲しさで胸がいっぱいになる。

せっかく、夢を叶えるためにここに来たのにいまだ叶えられず。

小学生のころから頑張っても頑張っても、レベル0のまま。

能力は才能がものを言う面が強いが、才能がすべてではないと考える頑張ってきた。

だがそれでも能力はレベル0、一向に進展する気配がない。

思考が暗く、重くなっていき思考の渦にとらわれそうになる。

「……っていけない、今こんなこと考えてもしようがないよね
才能がなくても頑張れば何とかなる！それが私のモットーよ！」

首をふり、暗い思考を振り落とし追跡のほうに専念すべきだと朱音は思考を変える。

そして顔を上げ植木の追跡を再開しようとした。
が、しかし。

「つてあれ……？もしかして、見失ったー！？」

そう叫び、愕然とする。

先ほどいた植木は忽然と消えていたのだ。

…先ほどの思考の渦にとらわれている間にどこかにいつてしまったようだ。

「さっさと見つけ出さないと、私の計画がパーだー！」

まだ遠くにはいつてないはず。

そう考え大慌てで植木を追うべく走り出した。

「あーもう！あいつどこに行ったのよー…」

あっちこち探し回り、時はすでに四時過ぎである。

どこを探しても目的の人物は見当たらず、他にどうすることもできずにここまで来てしましようがないので公園で休むことにしたのだ。

自販機でジュース　イロモノっぽいラベルが付いた　を買った朱音はベンチに座り

ふう、と息を漏らす。

そして朱音が缶のふたを開けようとしたとき、公園に聞き覚えのない男の怒声が響き渡るのに続いて聞き覚えのある少年の声が響いた。

「てめえなめてんのか、ああ！？」

「だからさっきから言ってるだろ。そいつをはなせよ、嫌がってる

じゃん」

朱音はいきなり響いた声に驚き、うつかり缶を落としそうになったが寸前で耐えきり
ほっと息をついた。

そして何事かと声のしたほうへ顔をむけたところ、見知った顔が目に入る。

「ああ、何だデメエ」

「やんのかこらあ!!」

(あれって……植木? あいつ何してんのよ)

不良らしき男たちに罵声を浴びせられ、それでも堂々と立っている少年は間違いなく植木だった。

不良たちの後ろにはかすり傷がある高校生くらいの少年が倒れており、どうやら植木はこの少年を助けようとしたようだ。

植木は脅されてもどこ吹く風で相手を睨みつける。

朱音はなんとかしないと、と焦りつつ同時にある期待が生まれていた。

(もしかしたら、能力を使うかもしれない……これはチャンスね!)

朱音はそう考え近くにあった自動販売機の後ろに回り込み、ばれないように息をひそめた。

男たちの数は八人程度、いくら強くても一人でさばき切れる数じゃない。

ならば絶対に能力を使わざるを得ないはずだと朱音は考えたのだ。そのチャンスを逃すか、と目を凝らす。

「だーから、さっさと放せて言ってるんだって。そいつ嫌がってるだろ」

「このガキ……調子に乗りやがって……！」

それでもペースを崩さない植木について煙草を吸っている男がしびれを切らし、拳を振り上げる。

無慈悲な暴力が植木に向かう。

…来るか！と朱音が身構えた瞬間

鈍い音を立てて、植木の顔がぶち抜ぬかれた。

「……あれ？」

「おらあ！調子に乗ってっからこうなるんだよ！」

「何もできないくせに出しゃばってんじゃねえよ！」

（あ、あっさりやられたー！）

あんまりな事態に朱音は顔面蒼白になりつつも突っ込みを入れる。どこか哀愁が漂い、嘆きたくなるような雰囲気だ。

能力を使うかと思いきや、そぶりも見せずにあっさりとやられてしまったのだから致し方ないかもしれない。

そのまま植木は何もできずぼこにされている。

ゲシゲシッと足蹴にされさっきの勢いはどこに行ったんだ、と朱

音の考えが頭をすぎる。

「ちょっとあんた達！そいつを放しなさいよ！」

「ああ？今度は何だよ。こいつの仲間か？」

さすがにこれ以上はまずいと考えたのか、朱音は助け船を出す。すると心底煩わらしそうに男は足元の植木を指差し、そう問いかける。

…どうでもいいが、少年の格好は非常に情けない。

「そうよ、さつきから見てたら多人数で一方的になんて。恥ずかしいの？」

朱音は助けに入ったはいが内心かなり焦っていた。男たちをどうにかする手段が何一つとしてなく、逃げるにしたり植木を

回収しなければならぬこの状況は非常に不利であるからだ。

ああ、なぜこうなってしまったのだろう、と朱音は自身の不幸を呪った。

「ちっ、さつきからうぜえ奴ばかり出てきやがるな……
とりあえずやられとけッ！」

不良はそう言い放ち、啞えていた煙草を捨てると朱音に襲いかかる。

ああ、こんなこと前にもあったなあ…と朱音はデジャビュを感じつつ目を瞑る。

しかし、その行為が最後まで行われることはなかった。

「おい、お前の相手は俺だろ……そいつじゃねえって」

当たる寸前のところで止まる。

男が振り向くとそこには緑髪の少年…植木が立っていた。
怒りを失っていない力強い瞳が男を貫く。

「ああ？オメエは後だ、そこでびくびく震えてろ！後でこいつと同じ目にあわせてやるからよー！」

そう言って朱音のほうをむきなおすとまた襲いかかるうとし始めた時、植木は行動を起こした。

いきなりしゃがみ込むと、先ほど男が落とした”煙草”を拾い上げる。

（あんなの拾ってどうするんだろ……？）

朱音はこちらに向かってくる脅威には目もくれず、植木の行動にくぎ付けだった。

植木は男を睨みつけつつ先ほどの煙草を”手で包む”
そして 能力が発動した。

手から緑の眩く光が溢れだし

植木の手から現れたバット状に成形された木での全質量がのつたスイングで

男の意識を刈りとった

「だから、お前の相手は俺だって。そいつじゃねえよ」

朱音を指さした後、作り出した木を肩に担ぎ、事も無げに男に対してそう言い放つ。

そして、さて次はどういったと言わんばかりに回りを見渡した。先ほど殴り飛ばした男は白目をむき完全に伸びている。

…一瞬であたりが静寂に包まれる。

男たちはいったい何が起きたのかわかっていないのか、口をあぐりあけて石造のように固まっている。

そして一人の男がぼそっとつぶやく。

「こ、こいつ能力者だ……！」

能力者の強さはどこでも知られており、それに勝とうなんて考える無能力者はいない。

レベル3あたりでもかなり理不尽なのに、レベル4や5なんてのは化け物級なのだ。

学園都市の最上位に位置する一方通行アクセラレータなんかは戦術核も効かないとさえ言われている。

「能力者なんて相手にしてられっか！」

「うわああああ……！」

一人の能力者だという声を皮切りに状況把握ができたのか、次々と男たちの顔が真っ青になる。

そして蜘蛛の子を散らすように男たちは逃げて行った。

「あ、おい！こいつに謝っていけよ！……っってもう逃げたのか、はやいなー」

そう植木は言葉を荒げるが、もうすでに男たちは豆粒のようになっていた。

心なしか、最後のほうは若干の感心を含んでいたようにも聞こえる。

…そんなところでの感心は男たちも欲しくないだろうと思うのだが。

そして、その視線を茫然とし、へたり込んでいる朱音に向ける。

「誰だかしらねーけど、助けてくれてサンキューな。じゃあなー」

何事ともなかったかのように朱音に礼を言うところと方向転換し、植木はさつさと帰ろうと公園の外へと歩みを進める。

しかし、それは途中で中断させられた。

いつの間にか立ち上がった朱音に手を力強く掴まれ、帰ろうと歩む足を強制ストップさせられたからだ。

植木が疑問に思い、朱音のほうを振り向くと同時に

「あんたレベル0なのにどーして能力使えるのよ！

そもそもあんな手から木を出す能力なんて聞いたことないし！

っーかあんた本当にレベル0！？」

「ぐ、ぐるじい……何言ってるかわからん上に気持ち悪くなってきた……」

肩を掴まれてブオンブオンと揺さぶられながら一気にまくし立て上げられた。

とりあえず能力関係のことは全部吐け、早く吐け、とにかく吐けと言わんばかりだ。

その間揺さぶられまくっている植木はたまったものではない。
知っていることを吐く前に別のものが出そうである。

「あーあ、ついにばれちゃったんですね……」

あれだけ能力は他の人に見られないようにしろって言ったのに……

……」

「！？」

植木がいろいろリバーシそうになったその時、二人のものではない少々怒りと疲れがこもった第三者の声が響いた。

「あ、よっちゃんだ。元気にしてたかー？」

「元気にしてたかー、じゃないですよ！あれだけ散つつつ々言ったのにどうしてあなたは……」

植木に空気を読まない言動に、よっちゃんと呼ばれた男 スーツを着た平々凡々な格好をしている はこめかみをぴくぴくさせながら植木に怒鳴っている。

……結構ストレスがたまってるそうである。

植木に対するストレスの多さは散々を言うときの間のとり方で測りとれる。

このまま朱音を放置しながら説教が続きそうになったのだが。

「あーんたね……」

植木に対するお説教タイムは朱音の声にて中止される。

よっちゃんがあたかも怨念のような声にビクウ！と体を震わせる。

ガミガミと、植木に苦言を言うのに氣をとられていたせいで今の今まで全く気付かなかったのだ。

そして油が切れたブリキ人形のように後ろを向くとそこには、この世のものと思えない邪悪な顔　というか顔が文字どおり鬼のようになっている　朱音がいた。

「一体どういうことが、きっちり説明してもらわよー！」

「は、はいiiiiiii！」

公園に男の微妙に情けない声が響くとともに、鳥がバサバサと大声に驚いたように飛び立っていった…

ゝ植木恭介の法則（前篇）ゝ（後書き）

小説は書いたの初めてなのですが、かなり緊張してます…
時間ができたらちまちま手直しとかしたいですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6992o/>

とある少年の正義の法則

2010年11月4日02時41分発行